

エビデンスに基づいたケアの模索 1

スムーズな排泄の試み

(医)南東北春日リハビリテーション病院
回復期リハビリテーション病棟
鈴木文子、岩本恵美、二瓶礼子

【はじめに】

回復期リハビリテーション病棟における患者は、機能面の改善や ADL 向上などの変化が著しい。同時に学習者でもある。その中でも「排泄」は三大介護のうちの一つでありチームでの関わるべき問題も大きい。排泄についての関わりをロイの適用看護モデルを参考に、基本的生理的ニードに対して多い便秘に対する下剤使用に注目した。

【目的】

排泄に関する現状把握、便秘の改善と下剤の適切化

【対象】

下剤使用患者 25 名

【方法】

水分摂取と離床時間延長介入を 4 週間施行、病前・介入前後の水分摂取量、離床時間、排便回数、下剤服用状況、BI の評価、アンケートより患者の主観的情報を得る。

【結果】

1. 介入後、下剤中止 7 名・減量 7 名・不変 11 名
2. 病前・介入前の順で、水分摂取量 954ml・732ml($p = 0.1302$)、日中臥床時間 0.9 時間・4.2 時間($p < 0.0001$)、排便回数 5.6 回/週・4.9 回/週($p = 0.2141$)、BI99.6 点・60.2 点($p < 0.0001$)、介入後、水分摂取量 1151ml($p < 0.0001$)、日中臥床時間 3.1 時間($p < 0.0113$)、排便回数 4.9 回/週($p < 0.8916$)、BI66.2 点($p < 0.0001$)
3. アンケートでは、将来を考えた回答が得られた。

【考察】

器質的原因による便秘は医学的対応が主となる。弛緩性・痙攣性・直腸性便秘、脳脊髄疾患による便秘には看護ケアの果たす役割が大きい。深井らは、便秘のケアの根拠として水分、運動負荷、体位、教育、食物繊維、腹部マッサージ、温電法等を挙げている。今回、ロイの適応看護理論に基づき、水分摂取増加、離床時間延長の行動を起こした。結果、目的であった便秘自体の改善、下剤の適切化が得られた。さらに、便秘に対する正しい認識、学習者としての役割機能に変化させる事、訴えを適切に把握し自然排便を狙える「効果的適応」を達成した。排便習慣や下剤に対する理解など、患者の視点に立ってアセスメントし、個別的な排泄教育をし根拠に則ったケアを展開することが重要と認識した。